

## 子どもがとらえる小学校体育授業の日韓比較

宮本隆信（高知大学）

The Japan-South Korea Comparative Study of The Elementary School Physical Education by A Student's viewpoint

### 要旨

本研究は、教育課程の上で共通点の多い日本と韓国の小学生に焦点をあて、体育授業を子どもたちがどのようにとらえているのかを体育授業評価構造と実践単元授業を通して、子どもたちの授業評価傾向を明らかにすることを目的としたものである。その結果、(1)子どもの体育授業評価構造は、日韓ともに6因子が抽出され、抽出された因子は、日韓両国の体育目標と概ね一致していた。(2)実践授業を通じた子どもの体育授業評価において、日韓で授業評価傾向が異なり、体育授業目標や授業の見通しについて、実践授業場面で子どもたちの授業へのとらえ方に相違がみられる可能性が示唆された。

キーワード：日韓比較,小学校体育授業,子どもによる体育授業評価

### I 研究目的

日本と韓国は、2002年の日韓ワールドカップを契機として、文化・スポーツ交流が盛んに行われている。日本においては、韓国のドラマ、Kポップなど韓流がブームを越えて韓流文化として根付きつつあり、韓国においても日本の大衆文化解放により映画、Jポップ、書籍など広く社会に受け容れられてきており、民間レベルや研究者間レベル（刈谷 2008, 2012）での日韓交流は積極的に行われている。

日本と韓国は学校制度、教育課程、ナショナルカリキュラム、小・中学校の義務教育など教育に関して多くの共通点がみられる。特に体育科においては、現在の教育課程では多少相違がみられるものの、戦後から2007年くらいまで、10年前後をタームとしたナショナルカリキュラムの改訂、体育科の目標、体育の学習内容の領域区分など、ほぼ同様であったことも分かっている（刈

谷ら 2005a, 佐々木 2012）。

日韓の小学生教科別好き嫌い度比較研究では、両国とも体育科の好きな度合いが全教科中最も高い得点であり、他教科との関係において、好き嫌いが他教科の好き嫌いに影響されないという特徴もみられている（刈谷ら 2005b）。また、子どもの遊び比較において、遊びの内容はほぼ同じであったが、遊びを取り巻く環境や実技系教科との関係で授業の遊び経験や自己認識で異なる結果が出ている（刈谷ら 2008）。

このように日本と韓国は、体育科について教育内容や子どもの体育への関心、遊びの実態などでも多くの共通点を有している。しかし、通常行われている体育授業を子どもたちがどのようにとらえているのかは明らかにされていない。

体育授業を子どもがどのようにとらえているのかを量る方法として、体育授業について、直接子どもに授業を評価させるとい

うものがある。日本においては、この体育授業評価研究が 1970 年代から蓄積されてきており（小林 1979, 梅野ら 1980, 鐘ヶ江ら 1985, 高橋ら 1994）, 授業の効率化や授業改善のための資料として、多くの現場で活用されている。また子どもが評価するよい体育授業は、目標が十分に達成され、学習成果があがっている授業であるといわれている（高橋, 岡澤 1994）。

そこで本研究は、日本と韓国の小学校体育授業において、(1) 子どもたちの体育授業評価構造を明らかにすること。そこで得られた評価構造から作成した評価票を(2) 単元を通じた実践授業に活用し、子どもたちの体育授業評価傾向を明らかにすることを目的とする。このことは、今後の日韓相互交流における教育実践研究への貴重な資料となるものと考えられる。

## II 研究方法

### 1 日韓の子どもの体育授業評価構造比較

子どものとらえている体育授業がどのようなものかを明らかにするため、これまで日本(宮本ら 2003a)と韓国(宮本ら 2011)でそれぞれ行われたものを比較対象とした。

#### (1) 日本の子どもの体育授業評価構造

- ・調査日時：2002年3月～4月
- ・対象：K 県の小学校 5, 6 年生 463 名（内訳；男子 223 名, 女子 240 名）
- ・項目：学習指導要領目標, 指導要録（観点別評価）, 教育内容, これまでの体育評価研究から教科として授業観の表れる項目を 48 項目設定した。
- ・分析方法：SPSS11.0J for Windows を用いて因子分析（バリマックス回転）を行い、固有値 1.0 以上の因子に因子命名を行った。

#### (2) 韓国の子どもの体育授業評価構造

- ・調査日時：2009年10月～11月
- ・対象：S 市, K 道, T 市の小学校 5, 6 年生 391 名（内訳；男子 202 名, 女子 189 名）
- ・項目：日本で作成した項目(48)を基に韓国の教育課程(目標, 内容)を加え、現地の研究者と教員と協議を行い、教科として授業観の表れる項目を 52 項目

設定した。

- ・分析方法：SPSS13.0J for Windows を用いて因子分析（バリマックス回転）を行い、固有値 1.0 以上の因子について因子命名を行った。

### (3) 共通関連項目

- ・教師評価 3 項目（熱心な指導、明るい指導、よいアドバイス）
- ・総合評価として子どもが受けている授業に対して「よい授業である」項目を設定し、子どもの体育授業評価構造との関連を分析した（高橋ら 1994）。

### (4) 項目の得点化・集計方法

- ・すべての項目に対して、回答を「はい」「どちらでもない」「いいえ」の 3 択とし、それぞれ 3, 2, 1 点として得点化し集計を行った。

## 2 日韓の体育授業実践比較

日本と韓国の小学校で授業を実施するにあたり、①小学校高学年(5, 6 年生)を対象に同時期での授業実施, ②教師歴 10 年以上の教師, ③一単元授業, ④単元時間 6～8 時間, ⑤授業計画を作成する, ⑥毎時間終了後の授業評価アンケート(10 項目, 3 点法, 授業評価構造で得られた因子を中心に作成されたもの)の実施, ⑦単元終了後の教師への聞き取りを共通項として検討し、観点とした。異なる教材を比較することについて、教材の一般的な特性による差異は存在するものの、単元教材としての学習過程(単元計画)や単元を通じた目標に対する子どもの授業評価を分析観点とする。体育授業の単元教材の特徴は「導入-展開-整理」の特徴を有し、子どもの授業評価は、単元進行で徐々に高くなる(刈谷 1991)としており、単元の学習過程と授業評価を詳細に分析する。

### (1) 日本の実践授業

- ・対象：K 市小学校 6 年生 32 名(男子 16 名, 女子 16 名)
- ・実践時期：2010年10月～11月
- ・教材：体ほぐし
- ・単元時間：6 時間

(2) 韓国の実践授業

- ・対象：S市初等学校6年生27名（男子16名，女子11名）
- ・実践時期：2010年10月～11月
- ・教材：競争活動（ネット型競争）
- ・単元時間：8時間

III 結果と考察

1 子どもの体育授業評価構造比較

(1) 体育授業評価構造

子どもの体育授業評価構造は，因子分析によって日本，韓国とも固有値 1.0 以上の因子が 6 因子抽出され，因子構成，負荷率 0.4 以上の項目を中心に因子名が命名されている（表 1）。

項目	日本			韓国		
	因子名	固有値	寄与率(%)	因子名	固有値	寄与率(%)
1	楽しさ	4.8	9.9	技能	6.9	13.3
2	まもる	4.2	8.7	関わる	5.4	10.4
3	よろこび	4.1	8.6	学び方	4.6	8.8
4	学び方	3.7	7.6	まもる	4.0	7.7
5	技能	3.4	7.2	体力	2.5	4.8
6	自信有能感	3.0	6.3	めあて	2.1	4.1

日本は、「楽しさ」「まもる」「よろこび」などの因子寄与率が高く，子どもたちは，これらの内容について体育授業をとらえる観点として重視している。これらは，体育授業で目標とされ，目指されてきた「運動の楽しさ体験」や社会行動などが子どもたちにも体育授業の重要な目標としてとらえられていることを意味している。抽出された6因子は，調査時の体育目標（文部省 1998）と概ね合致していることが分かった。

韓国は，「技能」「関わる」「学び方」などの因子寄与率が高く，これらの因子について体育授業をとらえる重要な観点として考えている。韓国の体育科目標は，教科目標，初等学校目標，体育科下位目標に区分され，下位目標はさらに身体領域（運動機能，体力），認知的領域（知識の理解，活用），情緒的領域（望ましい態度，規範の習得）に分か

れている（教育部，1997）。体育授業では，この下位目標の達成が目標になると考えられる。抽出された6因子は，細分化されているが，この下位目標に概ね合致していることが分かった。

体育授業評価構造から日韓の子どものとらえる体育授業は，体育目標に沿った形で授業をとらえていることが分かった。子どもたちは，体育授業で目標とされていることを認識して授業を受けている。

日韓に共通する因子として，「技能」「学び方」「まもる」の3因子がある。これらは，体育教科に共通する特徴であると考えられる。「技能」は，運動の楽しさや喜びを感じる最も重要な観点であり，「学び方」は技能習得の方法や学習活動方法など必要な観点である。また「まもる」は，体育の学習規律確立のためや社会生活を営む資質や能力として重要な観点である。

(2) 体育授業評価構造の各因子と「よい授業」評価との関係

日本，韓国の子どもたちによる体育授業

因子	$\beta$ (標準偏回帰)	r (単相関)
楽しさ	.360 ***	.570 ***
まもる	.152 ***	.398 ***
よろこび	.179 **	.547 ***
学び方	.038	.524 ***
運動技能	.110	.504 ***
自信・意欲	-.082	.429 ***
重相関係数 R	.635 ***	
決定係数 $R^2$	.396	

$R^2$ は自由度調整済み (p<0.01\*\*, p<0.001\*\*\*)

因子	$\beta$ (標準偏回帰)	r (単相関)
技能	-.088	.441 ***
関わる	.489 ***	.648 ***
学び方	.089	.463 ***
まもる	.208 ***	.543 ***
体力	.093	.417 ***
めあて	-.042	.364 ***
重相関係数 R	.675 ***	
決定係数 $R^2$	.447	

$R^2$ は自由度調整済み (p<0.001\*\*\*)

の評価構造で得られた因子が子どもたちの評価する「よい授業」とどのような関係にあるのか重回帰分析(標準偏回帰分析, 単相関分析)されたものを比較検討した。

日本の体育授業評価構造の各因子と「よい授業」の関係は, すべての因子が「よい授業」と有意(0.1%水準)な相関関係にあることが分かった。また標準偏回帰分析の結果から, 「よい授業」に影響する因子は「楽しさ」(0.1%水準)「まもる」(0.1%水準)「よろこび」(5%水準)であることが分かった。日本の子どもたちは, よい体育授業を評価するとき, この3因子に影響をうけて評価している(表2)。

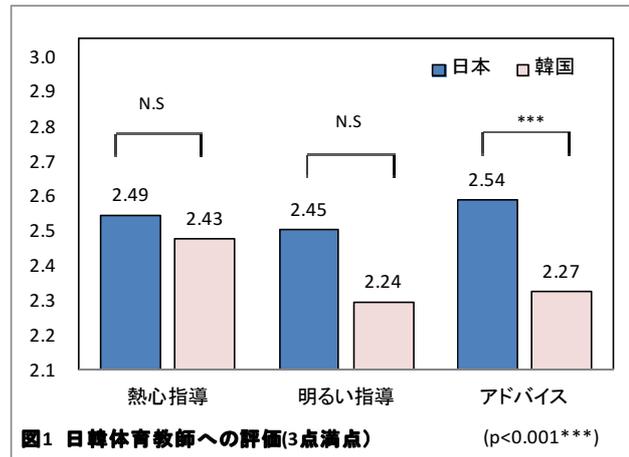
韓国の体育授業評価構造の各因子と「よい授業」の関係は, 日本と同様すべての因子が「よい授業」と有意(0.1%水準)な相関関係にあることが分かった。また標準偏回帰分析の結果から, 「よい授業」に影響する因子は「関わる」「まもる」(0.1%水準)の2因子であることが分かった。韓国の子どもたちは, よい体育授業を評価するときはこの2因子に強く影響をうけて評価している(表3)。

日本, 韓国とも, 子どもの体育授業評価構造の各因子と「よい授業」との相関関係が認められたが, 「よい授業」に影響する因子, つまり「よい授業である」と評価する基準が異なっていることが明らかになった。これは, 日本では楽しさを重視した体育授業が展開されていること, 韓国では小学校体育を身体活動価値の基礎教育として, 基礎技能の習得や運動秩序, 規範の形成が強調された体育が展開されていることからこのような結果になったと考えられる。

### (3) 体育教師への評価

体育授業を担当している教師について, ①熱心に指導, ②明るい指導, ③適切なアドバイスについて, 3点法で集計したものを比較検討した。

日本も韓国も小学校で体育授業を担当している教師は基本的にクラス担任であるが, 学校によって5, 6年生の体育授業を体育専任教員が行うところもあり, 日本, 韓国とも



に同様な教育環境であるといえる。

調査の結果から, 日本の体育教師評価は, すべての項目に大きな差異がみられず, 2.4~2.5の間で分布していた。子どもたちは, 体育授業を担当する教師は熱心で, 明るく, また適切なアドバイスをしてくれると評価している。

韓国の体育教師評価は, 「熱心な指導」は日本とほぼ同様であるが, 「明るい指導」, 「適切なアドバイス」は「熱心な指導」に比して少し低くなっている。子どもたちは, 体育授業を担当する教師を熱心に指導はしてくれるものの, 授業での明るさやアドバイスについて物足りなさを感じている。

日韓比較では, 「熱心な指導」「明るい指導」では有意差はみられなかったが, 「適切なアドバイス」で日本が有意( $t=3.552, p<0.001$ )に高かった。

## 2. 体育授業実践比較

### (1) 日本の体育授業実践

#### 1) 授業概要

授業は, K県K市の小学校6年生を対象として, 2010年10月から11月にかけて, 「体ほぐし」単元として6時間で行われた。対象学級は, 男女各16名の計32名であった。授業はグループ活動中心で行い, グループ間における子どもの運動能力が均等になることと, 男女混合になるように教師がグループ編成を行った。

#### 2) 教材の位置づけ

「体ほぐし」運動は, 体づくり領域の中にある運動で, 小学校1学年から取り入れられ, 6年生まで全学年を通して行われている

領域である。「体ほぐしの運動」は体を動かすことの楽しさや心地よさを運動に求めるもので、運動することにより欲求を充足させるというものである。指導にあたっては、体の調子を整える、仲間と豊かに交流するものである。また、精神的なストレスの解消に役立つようにするなど、体と心の安定を図ることができる運動である。したがって、達成や競争を楽しむものではなく、仲間と交流することや自分の体の動かし方に気づくことが大事とされている。(文部科学省2008)

3) 単元目標及び単元計画

単元目標：仲間と豊かに関わることの楽しさを体験する

1時間目は、クラス全員で数種類のじゃんけんゲーム(後だしじゃんけん、剣道じゃんけんなど)を行い、ここではじゃんけんをしながら、個からグループへ活動形態を変化させた。次に3人組グループと鬼(1人)による「木とリス」というレクリエーションゲームを行った。鬼によってグループ編成が可変するゲームで、より多くの仲間と交流するようにした。

2時間目は、「人数集まり」から始め、徐々に集まる人数を多くしていき、個からグル

表4 日本<体ほぐし>授業計画表

教材	体づくり運動
単元	体ほぐし
目標	仲間と豊かに関わることの楽しさを体験する
1	じゃんけんゲーム、木とリス、マーカー返し
2	ストレッチ、人数集め、気持ちを一つにして、パスパス鬼ごっこ
3	じゃんけんゲーム、ストレッチ、タッチでポン、ムカデ競走
4	リズムに合わせて、ミラーリング、新聞紙を使って
5	体を動かす、じゃんけんG、ストレッチ、風船G、しっぽとり、まとめ
6	太鼓で動く、ストレッチ、小グループ、しっぽとり、新聞G、まとめ

ープへ活動形態を発展させていった。次にグループに分かれて「気持ちを一つにして」というグループ全員の気持ちをあわせるゲーム、「パスパス鬼ごっこ」などのグループ内で協調しなければならないゲームによる活動を行い、グループ内の交流を積極的に行えるようにした。

3時間目は、「じゃんけんゲーム」から始め、「タッチでポン」「ムカデ競走」と前次と同様、グループで協力していく活動を中心に行った。

表5 日本の「体ほぐし」授業評価

項目	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
【楽しさ】	2.72	2.92	2.88	2.94	2.91	2.92
体育の授業は楽しいです。	2.81	2.94	2.91	2.94	2.94	2.94
体育では夢中になって、運動することができます。	2.63	2.91	2.84	2.94	2.88	2.91
【よろこび】	2.17	2.48	2.48	2.70	2.67	2.83
体育では、友だちや先生が励ましてくれます。	1.97	2.25	2.25	2.53	2.47	2.75
体育では、うれしいことやよろこびを感じることがあります。	2.38	2.72	2.72	2.88	2.88	2.91
【学び方】	1.98	2.72	2.61	2.78	2.83	2.86
体育ではグループでたてた作戦がゲームでうまくいことがしばしばあります。	1.91	2.63	2.72	2.75	2.84	2.84
体育では、運動の仕方や作戦を考えて学習します。	2.06	2.81	2.50	2.81	2.81	2.88
【まもる】	2.83	2.86	2.88	2.91	2.95	2.94
体育では、クラスやグループの約束事をまもります。	2.75	2.81	2.88	2.91	2.97	2.91
体育で、ゲームや競争をするときはルールを守ります。	2.91	2.91	2.88	2.91	2.94	2.97
【技能】						
体育では体がじょうぶになります。	2.03	2.22	2.22	2.56	2.50	2.69
【自信有能感】						
私は運動が上手にできるほうだと思います。	2.03	2.00	2.06	2.19	2.44	2.47
【平均】	2.35	2.62	2.60	2.74	2.77	2.83

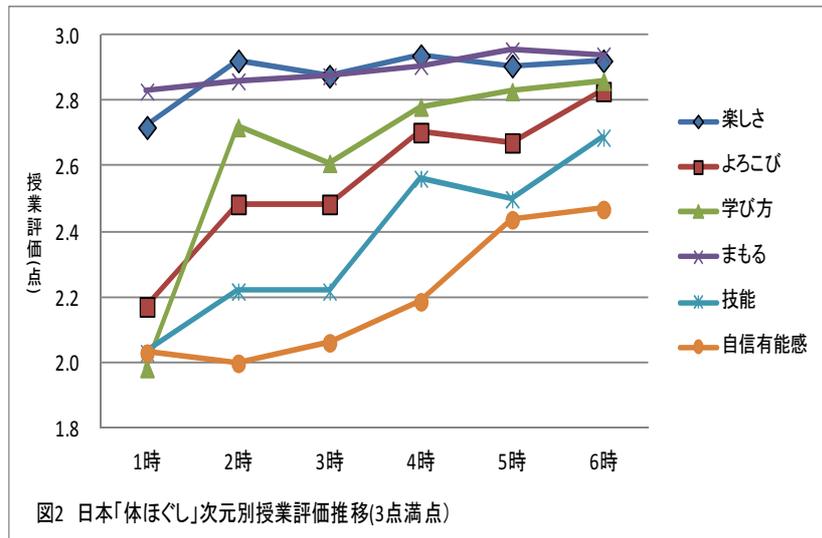


図2 日本「体ほぐし」次元別授業評価推移(3点満点)

4時間目は、音楽を流しリズムにあわせて動き、グループ内でリーダーと同じ動きにあわせる「ミラーリング」、新聞紙を使って体を操作する動作を行った。この時間は、これまで異なり、グループ内で交流する活動、また自分の体をどのように動かすかという内容であった。

5時間目は、「じゃんけんゲーム」「風船ゲーム」「しっぽとり」などクラス全体で交流を楽しむ活動の中でグループのメンバーで協力していくという内容であった。

6時間目は、「太鼓の音に合わせて動作を行う」「小グループ活動」「しっぽとり」「新聞ゲーム」などこれまで行ってきた活動のまとめとしてグループで協力する活動を中心に行った。

#### 4) 子どもたちの体育授業評価

授業評価構造の各因子から作成した体育授業評価票(10項目、3点法)を毎時間終了後に授業を受けた子どもたちに行った。

結果は表5の通りである。1時間目は2.35とやや低い値であったが、2時間目以降、2.6~2.8へと単元時間の進行に伴って授業評価は右上がりに高くなっていき、単元最後の6時間目が最も高い値であった。

次元、項目別では「楽しさ」「まもる」次元は、1時間目から高く、高いまま推移していた。

対象授業の子どもたちは、体育授業に対して好意的にとらえており、学習規律についてもしっかり認識できていると考えられる。「学び方」「よろこび」「技能」「自信有能感」次元は1時間目2.0~2.2前後と低い値であったが、2時間目に「学び方」「よろこび」次元が大きく向上し、最後の時間には2.8前後の高得点になった。「技能」次元は、2時間目、4時間目と2段階で値が向上し、最後の時間が最も高い値であった。「自信有能感」次元は、3時間目まで2.0前後と低いまま推移していたが、3時間目以降、向上していき、やはり最後の時間が最も高い値であった。

時系列でみると次元で値の高低はあるものの、2時間目、4時間目、6時間目に授業評価点の値が変化し、高くなっている。授業内容から、それぞれの時間では授業内容に変化がみられた時間であり、新たな授業経験により評価が高くなったと考えられる。

男女による授業評価の得点差はほとんどみられなかった。これは授業内容が達成、競争などの活動ではなく、仲間との相互交流が目標とする授業であったこと男女差が明確に表れる授業内容でなかったことなどから男女差があまりみられなかったのだと考えられる。

本授業の特徴として、時間経過とともに子どもの授業評価も高くなっていったことである。また単元目標である「豊かに関わる事の楽しさを体験する」は、「よろこび」「学び方」次元の評価推移によく表れており、時間経過とともに仲間と関わることによる「よろこび」が増していったと考えられる。また、関わりが深まることでグループ活動による達成観からか「技能」「自信有能感」といった次元も相乗的に時間経過で高くな

り、総合的に授業終盤にすべての評価が高くなった授業であった。

## (2) 韓国の体育授業実践

### 1) 授業概要

授業は、S市の小学校 6年生を対象として、2010年10月から11月にかけて、「競争活動」の「ネット型競争」の「ソフトバレーボール」単元として8時間で行われた。

対象学級は、男16名、女11名の計27名であった。授業は、グループ活動中心で行われたが、男女別のグループ活動であり男女一緒の活動はなかった。韓国では儒教文化の影響からか男女共習であっても体育に限らず男女別活動が一般的である。

### 2) 教材の位置づけ

競争活動の「ネット型ゲーム」に配置されている中の一つである。ネット型ゲームは、バレーボール型、足球（チャック）型、フリンゴ型、プレスクープ型、バドミントン型の5つが提示されており、6年生での実施になっている。ネット型ゲームにおける学習達成基準は、次の4点が示されている。

- ①相手側の空いたスペースへ球をだし、相手の守備や反撃を防いで点数を得るネット型競争の意味と特性を理解する。
- ②ネット型競争活動に参加し、基本技能（トス、レシーブ、パスなど）を習得する。
- ③ネット型競争活動のゲーム戦略（空いた空間を探して、攻撃する、効率的な守備位置の選定、チームプレーなど）を理解して、ゲーム活動に創意的に適用する。
- ④ネット型ゲームに参加し、規則を遵守して相手を配慮して礼儀を守る‘運動礼儀’の概念を理解してこれを実践する。

### 3) 単元目標及び単元計画

単元目標: ボールを正確にレシーブ、トスし、楽しく簡易バレーボールゲームを行う

具体目標:

- ①ボールを利用して、色々な技能を習得す

表6 韓国<ソフトバレーボール>授業計画表

教材	競争活動(ネット型)
単元	ソフトバレーボール
目標	正確にレシーブ、パスしながら楽しくゲームをする
1	サーブ、レシーブ
2	サーブ、レシーブ、トス
3	サーブ、レシーブ、トスを利用してゲームをする
4	サーブ、レシーブ、トス、スパイク
5	簡易ゲーム
6	グループ別ゲーム
7	
8	

- る。
- ②団体競技を通して、社会性を育てる。
- ③ゲームを通じて、興味を誘発させる。
- ④ルールを知り、最善を尽くす姿勢を身につける。
- ⑤協同的で、他人を尊重する態度を持つ。

1～4時間目までは、段階的に基礎技能を習得するため、1時間目は、サーブの方法とレシーブ（アンダートス）の仕方を中心に学習が行われた。2時間目は、サーブ練習を中心に行い、レシーブ方法とトスの仕方の学習が行われた。3時間目は、サーブ、レシーブ、トスを使用したゲームが行われた。4時間目は、これまでのサーブ、レシーブ、トス練習に加えて、スパイクの方法が行われた。

5時間目は、グループ内で選手を選抜し、簡易ゲームを行った。コートは、縦12m（自陣6m）×横6m×高さ1.5m。スパイクは禁止。サーブはコート内の真中にサーブゾーン（円）を設け、そこからサーブを打つようにした。

6～8時間目は、グループ対抗ゲームを行った。ネットから1m地点にセットゾーンを設け、セットゾーンでは、攻撃（スパイク）ができないルールを設けて実施した。

#### 4) 子どもたちの授業評価

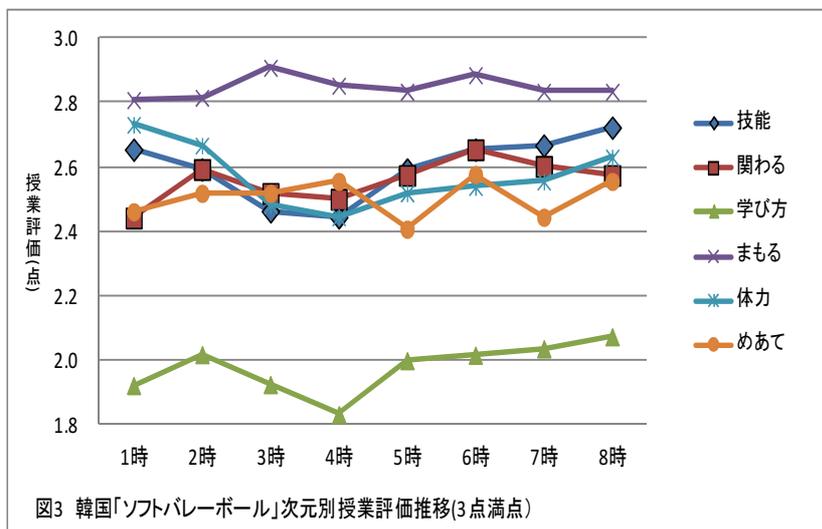
授業評価構造の各因子から作成した体育授業評価項目(10項目,3点法)を毎時間終了後に授業を受けた子どもたちに行った。結果は表7の通りである。

韓国の子どもたちは,1時間目から単元時間を通して2.4~2.5前後の値で推移し,単元はじめから終わりまで大きな変化がみられなかった。

次元,項目別では,「まもる」次元は,単元を通して2.8前後であり,学習規律について子どもたちは認識している。「体力」「技能」次元は,1時間目が2.7前後で比較的高い値であったが,2時間目から4時間目まで時間経過で値が若干低くなっている。5時

間目以降は徐々に高くなったが,最終的には「体力」次元は1時間目の値まで回復しなかった。2~4時間目は,新たな技術はでてくるものの基礎練習が中心であったことが影響しているのではないかと考える。「関わり」次元は,4時間目まで2.4~2.5前後で推移し,5時間目以降徐々に値が高くなっていった。「めあて」次元は,4時間目まで2.5前後で推移したが,5時間目以降は値が2.4~2.6の間で大きく上下し,ゲーム中心の時間になってから「めあて」次元が意識された時間とそうでない時間が表れた。「学び方」次元は単元を通して2.0前後で推移し,本授業では子どもたちに意識されなかった。これは項目内容が「感動」「授業外練

項目	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目
【技能】	2.65	2.59	2.46	2.44	2.59	2.65	2.67	2.72
体育はとても気分が良くなります。	2.65	2.67	2.48	2.41	2.59	2.69	2.67	2.74
少し難しい運動でも練習すればできるようになります。	2.65	2.52	2.44	2.48	2.59	2.62	2.67	2.70
【関わる】	2.44	2.59	2.52	2.50	2.57	2.65	2.60	2.57
体育は友だちと仲良くなるチャンスです。	2.42	2.59	2.63	2.56	2.67	2.77	2.70	2.70
体育は余暇の意義を認識して,生活化できます。	2.46	2.59	2.41	2.44	2.48	2.54	2.50	2.44
【学び方】	1.92	2.02	1.93	1.83	2.00	2.02	2.04	2.07
体育で学習した事が深く残ったり感動することがあります。	2.15	2.22	2.11	1.96	2.07	2.15	2.15	2.11
体育に習った運動を休み時間や放課後に練習する時があります。	1.69	1.81	1.74	1.70	1.93	1.88	1.93	2.04
【まもる】	2.81	2.81	2.91	2.85	2.83	2.88	2.83	2.83
ゲームをする時ずるい方法や単怯な方法はしません。	2.69	2.74	2.85	2.81	2.85	2.85	2.81	2.81
ゲームや競争の時は競技規則を守ろうとします。	2.92	2.89	2.96	2.89	2.81	2.92	2.85	2.85
【体力】								
体育はからだが丈夫になります。	2.73	2.67	2.48	2.44	2.52	2.54	2.56	2.63
【めあて】								
体育は自分の能力に適した練習ができます。	2.46	2.52	2.52	2.56	2.41	2.58	2.44	2.56
【平均】	2.48	2.52	2.46	2.43	2.49	2.56	2.53	2.56



習」という両項目とも授業外に対する項目設定であったことが影響していると考えられる。

授業評価の男女差は、単元をとおして差異はみられなかった。男女別々のグループで活動が行われたこと、ソフトバレーボールが女子でも恐怖心を抱かないで活動が行えることなどが関係していると考えられる。

本授業の特徴として、単元を通して授業評価に時系列や評価次元的にも大きな変化がみられなかったことである。

### (3) 日韓の授業実践比較

#### 1) 単元目標および授業計画

単元目標は、日本は「仲間と関わることの楽しさを体験する」(体ほぐし)であり、韓国は、「技能を身につけ、楽しくゲームを行う」(ソフトバレーボール)であった。

授業計画は、日韓とも「導入-展開-整理」でまとめられており、授業後半にまとめられるように計画されていた。日本は、単元前半は個で活動することもあったが、男女混合でのグループ活動が中心であった。韓国は最初から男女別のグループ活動であった。

#### 2) 単元を通した子どもの体育授業評価

日本の子どもたちは、単元進行で徐々に授業評価が高くなっていった。単元目標である「豊かに関わる事の楽しさを体験する」は、「よろこび」「学び方」次元の評価から十分達成された授業であるといえる。授業後の教師の振り返りにおいても、授業意図が90%程度達成できたとしており、教師と子ども共に目標が十分達成された授業であったといえる。

韓国の子どもたちは、単元を通した授業評価が時系列推移や評価次元の推移で大きな変化がみられなかった。単元目標である「技能を身につけ、楽しくゲームを行う」は、「技能」「関わり」次元の評価から考えると、目標は十分達成された授業とはいえない。授業後の教師の振り返りでも授業意図は80%程度の達成としており、教師も十分な目標達成ができたとは考えていない。

#### 3) まとめ

単元実践比較から、授業の計画や目標は、教材目標をおさえた計画が作成されていた。

しかし、子どもの授業評価において、単元を通した評価傾向に相違がみられた。本実践において、日本の子どもたちは、単元進行に伴って学習内容を認識し、単元目標の達成に向けた学習をしていたと考えられる。一方、韓国の子どもたちは、1時間ごとに授業が完結し、単元全体のつながりや単元目標の達成にむけた学習として認識されていない可能性があることが考えられる。単元を通した子どもによる授業評価傾向の差異について、子どもの授業へのとらえ方による相違なのか、教材特性によるものなのか今後事例を重ねて詳細に分析していく必要があると考えている。

## IV 結論

本研究は、日本と韓国の小学生に焦点をあて、子どもたちがどのように体育授業をとらえているのかについて、体育授業評価構造と実践授業による子どもたちの授業評価を通して明らかにすることを目的として行った結果、

(1) 子どもによる体育授業評価構造は、日本、韓国とも6因子が抽出され、日韓の体育目標と概ね一致するものであった。また共通する因子として「技能」「学び方」「まもる」があげられた。

(2) 子どもによる体育授業評価構造の各因子と「よい授業」には、日韓ともにすべての因子と相関関係がみられたが、影響のある因子が異なっていた。

(3) 実践比較では、単元目標や授業計画(「導入-展開-整理」)の設定は同様であったが、単元を通した子どもの授業評価の傾向が日韓で異なっている可能性が示唆された。

以上のことから、日本と韓国の子どもたちは、体育授業を自国の体育目標に即してとらえているものの、子どもにとらえる「よい体育授業」の基準や単元を通した授業評価の傾向が異なっており、単元目標や単元授業の見通しについて、相違がみられる可能性があることが分かった。

日韓相互授業研究は緒についたばかりである。今後、本研究で使用した評価票を適用

した日韓で複数教材の単元授業データを蓄積することによって、単元授業における子どもたちの体育授業評価傾向や子どもたちの体育授業へのとらえ方の特徴をより詳細に分析していくことが課題である。

## 文献

- 梅野圭史, 辻野昭(1980)体育科の授業に対する態度尺度作成の試み-小学校低学年児童について-, 体育学研究, 25-1, pp139-148
- 鐘ヶ江淳一, 高橋健夫, 江原武一(1986)体育授業に対する生徒の態度構造に関する研究, 奈良教育大学研究紀要, 22, pp9-21
- 小林篤(1979)『体育の授業研究』, 大修館書店, 東京, pp169-222
- 刈谷三郎(1991)体育授業における単元の学習過程の特徴・ALT・PE 観察法と生徒の授業評価を通して-, 高知大学教育実践研究, 5号, pp. 79-88
- 刈谷三郎, 宮本隆信, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子(2004)実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(3)-高知県児童による授業評価票試案に基づく各教科特性-, 高知大学教育実践研究, 18号, pp83-96
- 刈谷三郎, 申範澈, 宮本隆信(2005a) 韓国・日本における初等(小)学校体育課程の変遷に関する比較研究, 한국스포츠리서치 16-1, pp587-598
- 刈谷三郎, 宮本隆信(2005b)日韓小学生の教科別好き嫌い度比較研究, 2005KSR International Convention of Sports Science, pp39-50
- 刈谷三郎, 宮本隆信, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子(2007)実技系教科と遊びの日韓比較研究, 한국일본교육학연구, 13-1, pp1-18
- 刈谷三郎研究代表(2008)『実技を伴う教科と子どもの「遊び」に関する日韓比較研究』, 平成18年度~平成19年度文部科学省科学研究費(基盤研究C)研究成果報告書
- 刈谷三郎研究代表(2012)『実技教科授業の日韓比較研究-実技教科の子どもの「学び」の経験とは何か-』, 平成21年度~平成23年度文部科学省科学研究費(基盤研究C)研究成果報告書

- 교육부(1997)초·중학교교육과정, 교육부 고시제 1997-15 호
- 교육인적자원부(2007)체육과 교육과정, 교육인적자원부 고시 2007-79 호, 별책 11
- 佐々木邦彦(2012)韓国の学校体育, 笹川スポーツ財団研究レポート特別寄稿, <http://www.ssf.or.jp/topics/external/index.html>.
- 高橋健夫, 岡澤祥訓(1994)よい体育授業の構造, 『体育の授業を創る』, 大修館書店, 東京, pp10-24,
- 高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎(1994)体育授業の「形成的評価法」作成の試み:子どもの授業評価の構造に着目して, 体育学研究, 30-1, pp93-116
- 文部省(1999)小学校学習指導要領解説体育編, 東山書房, 京都
- 文部科学省, 附韓国の教育制度等, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/006/005.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/006/005.htm)
- 文部科学省(2008)小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版, 東京
- 宮本隆信, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子, 刈谷三郎(2003a)実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(1)-高知県児童の因子分析による授業内容構造-, 高知大学教育学部研究報告, 63号, pp11-28
- 宮本隆信, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子, 刈谷三郎(2003b)実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(2)-高知県児童の基礎統計による各教科の特徴-, 高知大学教育学部研究報告, 63号, pp29-35
- 宮本隆信, 刈谷三郎, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子(2011)한국 초등학교실기계 교과수업의 수업 평가 표작성의 시도 -아동에 의한 교과수업 조사의인자분석-, 한국스포츠리서치, 22-2, 123, pp3-10
- 宮本隆信, 刈谷三郎, 上野行一, 小島郷子, 笹野恵理子(2012)実技系教科授業における子どもの学びの経験-日本韓国の小学校授業比較を通して-, 한국일본교육학연구, 17-1, pp213-229